

みおしえ



認め合い 高め合う 喜び

唐がらし

—— 埼玉教区浄土宗青年会 ——

おもいやり

明道寺 眞島亮悟

先日、ある新聞に次のような読者からの投書が掲載されてきました。

六十六歳の女性の方が、電車に乗っていた時のこと。赤ちゃんを抱いたお母さんが乗ってきたので席を譲り、その赤ちゃんを抱いたお母さんが礼を言って駅で降りたあと、自分がまた腰掛けたら、座席の前に立っていてそこに座ろうとした高校生ぐらいの少年に暴言をはかれた……。

私は、この投書を読んで大変な衝撃をうけてしまいました。数日間頭の中から離れず、この少年は、世の中自分一人で生きていると思っていないのではないだろうか、自分もやがては、年寄りになるという事を忘れていないのではないだろうか、私自身がこのような場面に遭遇したら、どのように行動したら良いのか、と色々考えてしまいました。

そんな時に、ふと思ひ出した事があります。それは、子供を連れてある国に旅行に行った時のこと。その国では、高齢者・五歳位までの子供・障害のある方は、

どんな所でも優先されるのです。飛行機に乗るとき、バスに乗るとき、バスに乗っても必ず誰かが席を譲ってくれますし、降りる時も優先的に降ろしてくれます。自分よりも弱い立場の人には必ず手を差し伸べる、ということが徹底されているのです。その時は、「すごい国だなあ」と感心していましたが、よくよく考えてみれば、ごく当たり前な事なんだとつくづく感じました。日本の電車やバスに乗ると必ず備え付けてある優先席、これも皆が相手を思いやる気持ちさえあれば、すべての座席が優先席になると思います。

人の役に立つこと、それを仏教では「布施」といいます。お金や物を施すだけが布施ではありません。経典には自分の行動によって出来る「無財の七施」という七種の布施が説かれています。その中には座席を相手に譲ることや、相手の気持ちを考えて好意をにこやかに受けることも立派な布施の行であると示されています。このように、みんなが相手の気持ちや立場に立って考えれば、平和で和やかな誰もが暮らしやすい世の中になると思うのです。そうした素直な思いやりのある心にしてくれるのが「お念仏」ではないでしょうか。「南無阿弥陀仏」と声に出してお唱えする「お念仏」は、ご先祖様のご回向と同時に、老若男女を問わず、自分たちが少しでも人間的に成長でき、一人一人の能力と条件に応じて、今の時代を生かさせて戴くことを願って行なう事でもあるのです。

近頃の若い者から学ぶ

実相寺 落合崇志

多くの人は、昨今の若者たちをみて「近頃の若い者は……だ」とお思いのようです。その実際はどうでしょうか？

男子高校生たちはズボンを下げられるだけ下げて、裾をひきずり、靴のかかとを踏みつけて足をひきずるように歩いたり、片耳に二つ、鼻の右側に一つ、唇の片隅に一つとリングのピアスをつけていたりします。

女子高校生たちは、学校帰りの電車の中で、制服のスカートを巻き上げミニスカートにかえ、ふらふらしながら流行のルーズソックスにはきかえ、目的の駅が近づくとポケットベルのメッセージを確認して、ドアが開くと同時にホームへ飛び出して行きます。

それらを見ている誰もが「近頃の若者は(高校生は)……だ」と理解できないとの思いを抱いたに違いありません。

自坊の境内は、近隣にある高等学校の通学路(裏道)になっており、境内のベンチは時間によって高校生の憩いの場になっています。

このベンチの常連の一人に本当に「近頃の若い者は……」と思わせる学生がいます。髪を茶色に染め、耳・

鼻・唇にピアス、ズボンを下げて、靴のかかとを踏んでいる、といった様相です。そんな彼が「すみませんストローをいただけませんか」と使いなれない言葉で訪ねてきました。私が「ストロー？どうするの」と聞くと、はずかしそうに「ちよつと……ストローがないとこれが邪魔して牛乳が飲めないの……」と。彼が示したのは唇にきらりと光るリングのピアスでした。確かにピアスが邪魔で牛乳パックから飲むことが難しそうです。ストローを手渡しながら庭先に出て、彼にいろいろ尋ねてみました。学校のこと、アルバイト、友人、将来のこと、そしてピアスのこと。彼ははじめは言葉数も少なかったのですが、最後には熱っぽく語ってくれました。「ピアスとかこんな格好をしていると、みんなが何だと一瞬注目するけど、そうでなければ、誰も俺なんかをみてくれねえよ……」加えて「いつまでも、こんな格好してられないよ」と。

今、さまざまなところで「横並び主義からの脱却」が問われています。自己主張をはじめた若者(高校生)を「しようがないな」とあきらめるより「どう理解するか」と考えることで「ともいき」へのつながりになっていくと信じています。「近頃の若者は……だ」とこれからも言われ続けていくと思いますが、そうした時に若者をどう理解するかは大人に与えられた課題です。数日後、彼が小走りで境内を通り抜けようとしていました。格好は以前と変わっていませんが、本堂に向かって一礼して門を出て行きました。とても印象的でした。

供養（くよう）

「追善供養」「供養塔」「針供養」、または仏事の時のごちそうを「ご供養ですから」と勧めるなど、日常生活の中でよく使われる言葉です。

亡くなった人（ある時は物）の霊をなぐさめ、また記念に塔を建てるなどの意味で、多くの仏教行事に関連して用いられています。

本来は「奉仕する」「尊敬心をもって仕え世話をする」「供えさしむける」「尊敬・崇拜」などの意味を持つ言葉で、必ずしも仏教行事のみに限られたものではありません。

不殺生を説く釈尊には、香をたき、花や水を供え、灯をともしなどの奉仕が信者によって行なわれていました。仏教の初期の教団では、衣服・湯薬・飲食など、日常生活の必要なものを奉仕していました。後には、仏の徳を敬い、ほめたたえることから、単なる物質的な奉仕に止まらず、真心をもって敬い拝む態度をも供養というようになりました。

このような意味からすれば、もっと広い意味で使われていても良さそうなものです。

私たちお互いの生活の中で、仏様に対するような本来の意味の“供養”の心が芽生えてくればすばらしいのではないのでしょうか。

編集後記

今回は、眞島・落合両上人の登場である。テーマに「共生き」ということを据えてお願いしたところ、対照的な視点から味わい深い文章をいただいた。両上人には、この場を借りて厚くお礼申し上げます。

さて今号より前任の渡辺の後を受けて編集長の重任を預かることとなった。『みおしえ』の親しみやすさ、読みやすさを大切にしていきたいと考えている。

どうかよろしくお願いしたい。

〒三六五

埼玉県鴻巣市本町八一―三十一 勝願寺内
『みおしえ』編集室 代表 藤田俊彦